

Chapter 4

1 王城

赤煉瓦の古い洋館に戻ると、一同を窓から引き入れた。部屋に入ると、本棚から一冊の古い皮革装丁本を取り出し、適当なページを開く。埃っぽい匂いが仄かに漂う。

「さて、これだけ人数が集まるとわたしの部屋じゃちよつと狭いわ。しかも男ばかりで親がさすがに心配するだろうし。……いや、それ以前か（笑）。

白いローブを引きずるイヴイル枢機卿に、ロココ時代っぽいサテンのフロックコートのユレヒト、黒尽くめで黒いマスクまでしているヌエ……それに囚われの葺柳のイリュージョン……

だいたい、龍車の収まり場所もないし。

っていうわけで、考えたんだけど、こうすることに決定したわ」ページの上を指先で文字を書くように撫でる。

「さあ、これからはここがわたしたちの城砦よ。いいえ、王城と言ってもいいわ。携帯もできるし、便利だわ。持ち歩きのできる城砦よ。

さあ、ついてきなさい」

そこには中世の農家のような木製の扉があった。

「どうやって入るんですか、イユノ・アスラ様」

「普通でいいのよ。葺柳はわたしが連れて行くわ。あなたたちは自力で来なさい。行くわよ、さあ」

イユノが、そう、確かに普通に入った。まるで禅問答だ。『窓の外を牛の頭や背中が通り過ぎたのに尾が通り過ぎない』的な。

「なるほど。ユレヒト、疑義を持つべきではない。さあ、行きましょうか」

「イヴイル様、ああ、ヌエまで」

するとイユノが戻ってきた。

「ああ、イユノ・アスラ様」

「あら、まだいたの？ わたし、龍車を連れて行くの忘れちゃったわ」

そう言って窓の外にひらりと立ち、するつと龍車を入れて、

「むずかしいのよ。じゃ、いっしょに行く？」

ユレヒトの手をつかみ、入って行った。

深々とくるぶしまで埋まる絨毯。

暖炉の火が赤々と燃えている。周囲は大きな本棚で囲まれ、古くて大きな本が埃をかぶってたくさんならんでいた。櫛の木でできた大きな机があり、その上に地図やコンパスや羽ペンやインク壺や定規や羊皮紙などが雑然と置かれている。

「ここは書斎。作戦室でもあるわ。」

さて、茸柳、あんたの知恵を貸しなさい」

「知恵って……」

すっかり萎縮して普段の茸柳のようになってしまっていた。

「シノブを探すのよ」

イヴィル枢機卿が助け舟を出した。

「イユノ・アスラ、彼は事情を知らないのです。説明した方がよいでしょう。」

結局、その方が早い」

イユノも我に返ったように、

「それもそうね。」

って言うより、そもそも彼は茸柳の深層心理の人格の一つで控え目に言っても茸柳のすべてではないんだから。まず彼を茸柳に返すことなんじゃないかしら枢機卿？

彼がいまいまじゃ、茸柳もおかしくなるでしょう。別とは言え根は同じ、まったく根源から他者ではないのでしょうから。

ま、その辺は専門家じゃないからよく知らないけどね。

じゃ、行こうか。畝邨村へ。あ、いや、連れて来てもらおうか。

茸柳を、この秘密の城砦へ。

どうせ仲間になってもらうんだからさ」

「いえいえ、ちよつとお待ちください。

彼と主人格が会ってはまずいでしょう。人格が混乱をきたします。

茸柳氏の精神によくないでしょう」

「面倒臭いわねー。でも、わかったわ。じゃ、イヴイル、あなたが責任とって連れて来なさい」

「何の責任ですか」

「言い出しつぺだからよ」

「理不尽ですが、あなたに逆らっても仕方がない。だいたい、自然は理不尽なものです。理不尽をデフォルト（基本）と思わなくては。

承知いたしました。

では茸柳が寝ている間に、このイリュージョンに帰ってもらいましょう。その上で私が本人を召喚いたします」

「早くしてね。じゃ、ユレヒト、それまで仮眠でも取りましょう。少々眠いわ。

絹と金糸の刺繍と色大理石の柱やマホガニーでできた豪華な寝室も詔えてあるのよ」

眞神川の船着き場の傍に白舟家の一群があつた。三叉戟の家紋を掲げる壮麗な唐破風門の本家屋敷を中心に十二家族三十九世帯、約百五十人が集落を成している。近くにはいわゆる四脚鳥居とも呼ばれる両部鳥居があり、伊弉禰神イテネを祀った酉斗丹栖神社とりとにすがあつた。社殿は船形を模した珍しいもので、柱や梁や欄干にまとりつく龍神の他に海生生物や天牛や天馬や梟の彫り物が有名である。

イヴイルは茸柳のイリュージョンとともにまず神社は参拝し、白舟家の分家の一つである家の門をくぐり、鍵のかかっていない玄関を開け、音もなく廊下を進んだ。階段を上がり、茸柳の部屋の襖を開ける。

寝ていた。

「さあ、戻れ」

「はい」

イリ्यूジョンはそう言っただけで消える。

茸柳の身体が一瞬びくつとした。「やれ、やれ」

イヴィルは嘆息する。そして指を動かし、自分の周りに靨色の靄を煌めかせ漂わせる。掌に宝珠を現わし、宝珠からは熱のない白い焰が上がった。

「さて、こんなもんでいいかな。

さあ、ヴィシユヌ殿、お眼覚めなされ」

茸柳がぼんやり眼を開ける。イヴィルの方を見るが、無表情なのは状況が認識できていないからだ。寝惚けているためであった。

「どうか驚かないで下さいよ、茸柳・ヴィシユヌ」

しかし以外にも茸柳はすくっと起き上がり、

「本当だったんだ」

それを聞いて驚いたのはイヴィルの方であった。

「いやはや何とも、いったい、これは。どういうことですか」

むしろ茸柳の方がすまなそうな顔をした。

「驚かせたのなら、ごめんなさい。

実は夢で見えていたんです。神聖シルヴィエ帝国の枢機卿であるあなたが来ることを。

まさかゲームの中の存在（しかも環境的人物）でしかなかったあなたに逢う日が来るとは夢にも思いませんでした。

それは平衡さんがあなたに……」

「このような事態にさほど驚いてもない様子。意外です。しかもイユノ・アスラのこともご存じか」

「ええ。夢が、そう、夢の感じが普通じゃなかったんでこんなこともありえると感じていました。平衡さんのことは……」

いや、その、正確にはよくわかっていないんだけど、IEで説法をしていたときに、平衡さんがいたような気がしたので……それで、

その後の夢で……」

「どんな夢を見たんです」

「僕のダークサイドがコテンパにやられる夢です」

「素晴らしい。いや、残念ながらと言うべきか。」

ともかくもそれは夢ではなく現実だったのです。

考えてみれば当然ですね、彼だって、あなた自身なのだから。当然のことながら彼の体験はあなたの体験です。

ならば話が早い。さっそく城へ来てください。よろしいですね」

「しかし」

「しかし？ 何ですか？」

「いったい、僕にどうしろと。こんな時間に。事情もわかっていません」

「それは説明します。何よりも信じますか。それが肝要です。信じていないならついてきても後悔するだけでしょう」

「信じているかとはどういう意味においてですか。」

あなたや平衡さんを信じるかと言われれば微妙です。けれどこのことが現実であるかと思っているかと言われるならば感覚的に紛れもなく現実であると、あらゆる理性を超えて僕の心が主張しています」

「素晴らしい。」

あなたの魂にはやはり神の叡智が与えられているのです。

あなたの答はすべての意味において正しい。

むろん、私の智慧の限界の範囲内での評価ですがね」

「僕もあなたを信じる気持ちになってきました」

「いや、それはまだ早いな。私はそれほど甘くはないですよ。さあ、行きましょう。閣下が待っておられる」

ユレヒトやヌエを紹介され、改めてイユノを前にした茸柳は驚きを隠せなかったが、しかしさほどでもなかった。

「思ったほど吃驚されなくて少しつまないわ。しかも悪魔的な寝

間着姿なのに」

「い、いや。吃驚してるよ。」

し、しかも本の中に入るなんて。それにこの人たち……何ってたつて平衛さんとはほとんど話したことがなかったのに、いまこうしてこんな形で会話してるのが一番不思議かもしれない」

「お互い様ね。わたしたちそういうキャラだったから、かつては。」

ねえ、ところでイヴイル、説明した方がいいの？」

「話しました。シノブ・ラクシャシーのことやイリユージョンのこと、アザミ嬢の件も、それから娑斗獅氏の件も」

「娑斗獅の件はどうでもいいんじゃない？」

「そうでもありません。すべてが一連の陰謀である可能性があります」

「だって彼を意識し始めたのは何年も前よ」

「用意周到な計画だったとは考えられませんか」

「まあ、ありえなくはないけど、そこまで言うならわたしの眼覚めも計画的で実は怪しいわ。」

あんたのことを言ってるのよ、イヴイル」

「御意のままに」

枢機卿が胸に手を当てて頭を下げる。

「ふん」

イユノが腕を組んで笑みを含みながら睨む。

茸柳が口を挟んだ。

「あ、あの。」

ショッキングなことばかりだよ。

中原さん（アザミ）のことは確かに……そうかもしれない。僕が同じ高校生男子を惨殺……

平衛さん、あなたはどうかやって眼覚めたの？」

「なぜか、あるとき夢にイタルが夢に出てきたのよ。それが直接的なきっかけね」

「イタル！」

彝之イタルか！　ありそんな感じが……でも平衡さんは前からイタルに興味があったの？」

「そうでもない。娑斗獅の影響かな。」

そして眼覚めた。でも実際にはいろいろな要因があったわ。それが総合的にわたしを眼覚めに導いたんでしょね。

わたしの今日までの人生の何もかもが、もしかしたらそういう方向へ向かっていくよう仕組まれていたのかもしれない」

「すべて運命、アスラの計画だった、ってことですか」

「そうね。」

ま、イヴィルの言うとおり娑斗獅の件は誰かの陰謀ってことも考えられるけどね。可能性は否定できないわ。でも、お蔭で眼覚めたわ。

だから娑斗獅のことも陰謀のうちだと思えるなら、わたしの眼覚め自体が陰謀の一つ、って言いたくなるのよね。

わたしもすべてのことがよくわかっているわけじゃない、眼覚め切っていないから。まだまだ全知全能ってわけじゃないのよ」

で、あんたはどうなの？」

「僕は……」

子どもの頃からずっと、だよ」

「そうなの？」

まったくそうは見えなかった」

「恥ずかしかったから隠していたんだ」

「そうか。まあ、わかったわ。」

じゃ、これからはいいわね、茸柳。あんたがヴィシユヌでわたしがアスラ」

「わかった。」

葦原さんがあの大惨事、あの電車事故を起こした真犯人だなんて、信じられないけど、でも、事故ではなくて誰かがああいうことを起こしたと言われても、僕には笑い飛ばすことはできない。理解可能だ」

「なら、よかったわ。

で、わたしは羅刹女をやっつけたい、ってこと。単純よ。

で、智慧を貸してもらいたい……なんだけど、いま急に思いついたことがあるわ。その前に解決しておかなくっちゃいけないことがあるってね」

「何を？」

茸柳もイヴイルもそう訊いた。

「決まってるじゃない。

アザミのところへ行きわよ」

茸柳が激しく狼狽えた。

「え、いや、だって、何でだよ」

「もうバレてんのよ。

さあ、男でしょ？ けじめつけましょ」

「やだよ、なぜ、僕が」

しかしイユノは茸柳の首根っこをつかんだ。

「やめろ！」

凄まじい怒気が起こって、茸柳の全身から光の風が発せられ、イユノやイヴイルやユレヒトの髪が吹かれて靡いた。「うわ」

バランスを崩してユレヒトがよろめき、イヴイルが呻きを洩らす。

「おお、地球の自転に影響が出てしまいますよ！」

「さすが、本体はさらに凄まじいです」

ユレヒトも同意する。

しかしイユノは笑いながら、

「ふざけてんじゃないわよ、わたしは大まじめなのよ」

彼女が茸柳の鼻の頭に指を当てるとすべてが治まってしまった。

「ううう、まるでさっきの夢みたいだ……」

「現実よ。さあ、行くわよ」

まるで子猫のように茸柳は龍車に乘せられた。

「さあ、イヴイル、ユレヒト行くわよ。来なさい。じゃあ、ヌエ、出してちょうだい。」

アザミって、薙久簗町に家があるんだよね」

龍は彗星のように天翔け、再び薙久簗町に舞い戻った。た。イユノが思案顔で、

「さあ、どこにいるかしらねー」

精神を集中する。

「あら、まだこんな時間までお仕事中的よね。又エ、あのラブホの上に停まってちょうだい」

「ラブホ！」

イヴイル、茸柳、ユレヒトが声を上げた。特に茸柳の引き攣った苦しげな表情、落胆、動揺は痛々しいほどだった。

「あら、デリヘルって呼ばれたらそういうところへも出張するんじゃないの？ 自宅に呼ぶ人もいるって聞いたことあるよ。」

さあ、着いたわ。降りるわよ」

そこは『王城』という名のラブホテルだった。

「イユノ・アスラ、ここでどうする気ですか」

「だから、茸柳の思いを告白してもらうんじゃない。それですっきりすればいいのよ」

「そんな無茶な、ここで？」 茸柳が呻いた。

「窓から入るから。あ、その窓扉開いて、ガラス窓の開けるわよ」手品のようにすべての施錠が解かれていく。

するりと薄暗い部屋に入った。

「ひゃっ！ 何!？」

「う、うわっ！」

アザミの悲鳴と中年男の愕きの声。

イユノが指を鳴らすと照明が点く。

「アザミ、イユノよ。仕事中に邪魔するわ。ちょっと聞いて欲しい話があるのよ」

「な、何よ、あんた、何なの！ ありえない！」

完全に混乱している。掛布団を手繰り寄せて体を隠す。アザミも中年男も裸だった。茸柳の顔がますます苦しげに歪む。それは魂を

引き裂かれた者の絶望であり、すべてを壊され、喪った者の悲嘆であり、またどす黒い噴煙のような、それでいて凄まじく冷徹な、烈しい憤りであった。

「あわわわわ、何なんだ、何なんだ！」

中年男は狼狽し、混乱しきっていて下半身を隠すことも忘れていた。イユノは茸柳の憤りがそこに集中するのを察知して諭した。

「はしたないよ、茸柳。」

さ、あんたの気持ちをすべて出さない。告白しなさい。男ならストレートに奪いたいものを奪いなさい」

「ここで、このシチュエーションで、ありえないだろう！」

茸柳が堪らず叫ぶ。怒りも戸惑いもすべて緋い交ぜで、混乱し始めていた。アザミも全然状況がわかんないらしい。イヴイルやユレヒトの不思議な格好にも呆氣にとられていた。

「何なの、何言ってるの、あんたら、何なのよっ！ 何者？ イユノ、そいつら何なの！ 茸柳？」

そう言われても、さすがのイヴイルも言葉を出しかねていた。イユノはまったく冷静だ。

「あのね、アザミ、ちょっと聞いてくれない？」

茸柳わね、あんたに片想いしてるのよ。だからここで告白させるわ」

「何言ってるの！」

ここで！

ここでって、ありえないでしょっ！ 意味わかんないっ、って言うか、あんたら、どうやって入って来たのよ」

「構うことないわ。」

愛に躊躇なんかないのよ。さ、早くしなさい、茸柳」

イユノに気圧されて弱々しく、

「できるわけないよ……」

「好きなんでしょ？ 嫌いなもの？ 歩夢のものになっていいの？ ダメモトで言いなさい！」

茸柳が半泣きになった。

「好きなんでしょ？ 他の男に言いようにされていいの！」

「う、ううつ……」

泣き始めてしまった。

「いいから、言いなさい」

「ちよつと、あんた、イユノ、あんたさ、ちよームチャ言ってるよ、この状況で言えるわけないじゃん！」

さすがにアザミの同情気味に……

「イユノ・アスラ、さすがに無謀では」

中年男が喚き始めた。

「おまえら、いい加減にしろ、これは犯罪だぞ！」

不法侵入だ、俺は何も悪いことをしていない、でも、おまえらの行為は犯罪だ！ いい加減にしないと」

イユノが睨む。

「へー。」

いい加減にしないと何なの？

情けないこととしていてでかいこと言ってるじゃねーよ、おっさん。人間って年取るとどうしてこう醜くなる奴が多いのかねー」

「何だと、きさまー。後悔させてやるぞ、俺は警察にも知り合いがいるんだ！」

「邪魔すんなよ。黙らないと後悔するのは、あんただよ。悪いこと言わないから黙ってな」

「おう、やつてもらおうじゃねーか！」

「はーい」

男の姿が消えた。

「え！」

そばにいたアザミが驚きの声を上げる。ユレヒトが、
「彼はいったいどうなったんですか？」

イユノが笑いながら、

「何でもないよ。」

ここから五百メートルくらい離れた繁華街の真ん中に瞬間移動させてやったのさ」

「しかし彼は裸では！ 服はここにありますよ！」

イユノが激しく笑う。

「当然の天罰ね。」

裸でここまで帰って来るしかないでしょう。財布もここだしね。でも、ここまで裸でたどり着けたとしても、中に入れてもらえるかしらねー。

フロント受付の人が入れてくれないんじゃないかしらねー。筋の通った説明もできないだろうし。

あははは」

茸柳がおずおずと言った。

「いくら何でも、やり過ぎでは」

アザミは哑然として何も言えない。

「あんたは告白すればいいのよ」

「嫌だ。僕はしたくない」

アザミが口を開いた。

「イユノ、話はわかったから、もうやめてやんなよ。ムリだよ。

って言うか、あんた何者なの、この前のことと言い……」

「わたしは神なのよ。否定できないでしょ。現に目の前でわたしの力を二回も見てるんだから」

「そうね。」

わかったから、茸柳がかわいそうだよ。あんた、酷過ぎだよ。

茸柳、はつきり言うけど、わたしはあんたに恋愛感情は持てないよ。歩夢がいるし、いなくてもムリ」

「わかっていたよ」

茸柳がうなだれてそう言うと、イユノが、

「あんた、それでいいの。不満があるんじゃないの。アザミにこんなことさせる歩夢がアザミを愛してるはずがないって何で言わないの」

「そんなのは人勝手だ。人には事情があるんだ……」

「あら、ずいぶん、大人じゃん」

「イユノ、いい加減にしなよ！ あんた、リアルに人間じゃないね。」

茸柳、あんたの気持ちはわかるし、あんたの言うことが正しいのかもしれないけど、わたしは歩夢が好きで、歩夢のためにこうしたいの。

間違っているかもしれないけど、それを止められないし、後悔しないわ」

茸柳はますます項垂れた。

「ごめんね。あんたにとっては残酷かもしれないけど、そうなのよ」

アザミがそう言ってから、イユノを見た。

「これでいいでしょ？ さっさといなくなつてよ」

イユノが微笑んだ。

「わかったわ。」

そして、わかつたでしょ、茸柳。これが現実なのよ。理不尽でもね。理屈なんて意匠みたいなもんね。

あはははは」

そして振り返り、

「じゃ、今度こそ帰るか、ユレヒト、イヴイル」

と言い、最後に、

「又エ、龍車を回してちょうだい」

窓から顔を出し、屋上に向かってそう声を張り上げた。

2 炎燦十文字円紋究極真実奥義

再び本の中で。

「茸柳、これですっきりして仕事に専念できるわね」
むつつりしていたが、

「僕は何で君について来ているんだか自分でもわからない。力で捻じ伏せられたからだろうか。」

いや」

イユノが興味深げに彼を眺める。

「ふーん。何なの？」

言ってみなさいよ」

「現実には理不尽だね。たとえば自然の営みだ。（そう思えば人の営みが理不尽なのは当然だ。人は自然の一部だから）

暴風雨や龍巻や豪雨や豪雪、旱魃や猛暑、雷や雹、時化や津波や洪水や土石流、噴火や地震や地滑り、寒波や火災や海流やすべては道徳や倫理や正義や哲学に関係なく非情で理不尽だ。

野に咲く花や皓々たる月、小鳥の囀りや川の流れ、爛漫たる桜花や錦繡たる紅葉、青い海を回遊する魚群、北方の狼の遠吠えや悠々飛ぶ鷹、虎や豹の美しい模様、行雲流水、山紫水明、銀嶺の偉容、田園の蛙の声や熱帯の鸚鵡、冬の鹿や兎の足跡、櫛に蔓延る蔦、鬱蒼たる椎や檜や榎や松や楠や杉や櫟や檜や櫟、牡丹や石楠花や菖蒲や椿や杜若や白百合や菊や向日葵や朝顔。

生命は決して道義ではない。けれど魅力を湛えているし、まさしく光り輝く生命だ。考概を論理法則に従った設計で建築する知はいくら精緻に組み上げて積み重ねても法則自体が作る自家撞着、矛盾の迷宮に陥るのに、自然現象は自信たつぷりに堂々と威を振るい、摩訶不可思議に複雑精妙な、不可説微妙な美しさと魅力を備えている。リアルだ。神々しくすらある。

僕が平衡さんに惹かれているのは、たぶん、そういうことなんだと思う」

イユノが素気ない顔で、

「さ、世辞はいいから。

それから平衡さんとか面倒臭いから止めてくれない。イユノでいいわよ。

探すのよ。そもそも何であいつはわたしに見つからないわけ」

「実家はどうか？」

「行くまでもないわ。いない」

「協力者がいますね」

イヴイルが言った。

「そいつがわたしの力を妨げているっていうの？
誰にそんなことができるのよ」

イヴイルが、

「ここ日本でなら天照皇大神や素戔鳴尊、大国主命……ですか」

「何で彼らが邪魔するの？ 眞神は火々禽の柵の戦いで敗れて以来、
潔く永久の誓約をしたわ。」

邪魔される謂われはない。奴らがそういう考えなら、わたしたち
が義理を尽くす理由はない。もう一度、戦争をするだけよ」

ユレヒトが表情を歪めた。

「戦争……」

茸柳が、

「簡単に言うけれど拙速に決めるべき問題じゃないよ。真偽をよく
見極めないと」

「では早くシノブを見つけないさい」

「シノブは何をしようとしていたのか。まずそこから考えよう。発
端に遡るんだ。」

シノブは君を警戒し、かつ君を挑発していた。君の本性を出させ
ようとしていた。なぜか」

イユノは苛立つてクラシカルな真空管のステレオのスイッチを入
れた。Charles Mingus の『Devils Blues』が流れた。

「そもそもなぜわたしは、アスラは封印されていたのよ。それが発
端ね」

「そうか」

イヴイルが言う、

「私は契約を交わしましたが、詳細な事情の説明はありませんでし
た」

「いつごろの話ですか」

ユレヒトが尋ねた。

「五〇〇〇年前ですね」

「平衛家が犂之家の臣下になったのは五五〇〇年前の養之^{ミノ}国、つまりクレタ島でのことだ。その頃にアスラが自らを封印すべき何があったのか」

茸柳がそう言い、腕を組んで考え込んだ。

「わたしがわたしを封印する理由は巨大な力が邪魔になったとしか思えないわね。自分で直截的に感じるところに拠れば。

それにしてもさ、もしわたしが眼覚めていたら火々禽の柵での戦いに負けはしなかったのにね」

茸柳が間髪入れずに尋ねる、

「本当にそうだろうか」

「あたりまえじゃん」

「だとすれば……、しかし君はなぜいま眼覚めるように設定していたのだろう」

「わからないわ」

イヴィルも頷いた。

「私にもわかり兼ねますね。アスラの真意は誰にも推し量ることができないのです」

「きっと完全に眼覚めるまではわたしにもわからないのよ。でもきつとすべてがわかった瞬間わたしはこの世のものではなくなっているような気がする」

「アスラというのは君だけなのかい」

「あんたはどうよ」

「むろん、数などというものは人間の錯覚を構築するために使う便宜的な概念で、無意味で羅列的な、狭義なものに過ぎない。

ヴィシユヌは一柱ではない。かと言ってたくさんいるのでもない。一柱と言っても差し支えないし、戯れに複数であっても構わない。

人の知恵など地を這う者の考え方だ」

「わたし以外にいても問題はないわけよ」

「君にとってアスラは眠っていたんだ。」

他では眼覚めていたかもしれないし、そうでもないかもしれないし、どっちでもないかもしれないし、どれか一つだけだったのかもしれない、君にとってどうあろうともね」

「つまり理屈であまり考えても徒労に終わるということね」

「自然現象と同じさ。ある意味、複雑精緻精妙過ぎるんだろう」

「ふうん」

「何だよ、その顔」

「何かさっきまでとはだいぶ違うなと思ってさ」

「何が？」

「自信に溢れているよ」

「僕が？」

「そうよ、人間って得意分野では輝くものね。あんたはやはり叡智の存在なのよ。智慧こそすべて。All you need is wisdom ね。」

あんたはあんたの叡智を理解して愛してくれる人を好きになるのが幸せなのよ。どういうわけか人間って自分を不幸にする人を好きになるものなのよね。」

あははは」

「君ってほんとに鼻持ちならない、やな奴だよね」

「仕方ないわ、最高神なんだから。そうそう、その調子よ、平衡さ、とか他人行儀は止めて言いたいように言いたいことを言いなさい。」

さあ、シノブを探しましょう。あなたの結論は？」

「大和朝廷はなぜかアスラの復活に懸念を抱いていたというべきだね。」

枢機卿イヴィル、何か心当たりは。封印の契約の際に何かそういう状況とか、何か動きや雰囲気でもいいや、なかったのかな」

「五〇〇〇年も前ですからね。」

日本に来る遙か大昔ですよ。大和は関係ないでしょう。アスラはただ私を召喚して約定を示し、契約しろと言っただけです」

「なぜあんただったのかしら」

「私にわかるわけがありません」

茸柳が考え込みながら、

「なぜ僕ら眞神の一族は東に移動し続けたんだろうか。それは以前からよく考えていたことなんだ」

「で？ あんたの考えは？」

「人口の増加、そして新天地と冒険を求めて。アレキサンダーが東征したように」

「ならばそうなんでしょう」

「なぜアスラは表舞台から去ったのか。」

平衛家のイシュラル（犂磬羅婁）はアスラと同一視されているが、アスラの方が古い神格だと思う。イシュラルは数ある派生のうちの一つだ。必ずしも同じ源から出たわけではないが、人間の奥深いところの同じ源から出ているのだと思う。それはもしかしたらイシュタルやイナンナやアッシュールやアフラやアンシヤルやアスタルテやアフロディーテやアテナなんかも同じなのかもしれない」

「それはわたしも考えたことがあるよ」

「話が少し遠くなるが、現象が陰陽の入り交じりで移り変わることによって常に変容するとしたら、無常だとしたら、陰陽のない存在は現象として見えず聞かれず触れない存在、非存在としていることになる。」

僕は自己流の解釈でこれが日本神話に言う独神の意味だと思う。だから独神はすぐに隠れてしまったのだ、と。いや、異論反論はたくさんあると思う、飽くまで自己流の勝手な思い込みだから。

アスラは本質的に独神なんだ。中国の盤古（宇宙開闢の創世神）のように見えない存在なんだ。あるいはシュメールの天空神アン、アッカドの天空神アヌのように」

「だからアスラは消えた、と。」

って言うか、封印され、奥に消えるのがアスラの本来の在り方、常態ってことなのね。

だったら逆になぜ出て来るの？　って言うか、五千年以上前までは表舞台にいたんでしょ？　そのときも本来の在り方じゃなかったってことなの？」

「そもそも森羅万象であるアスラは逆に言えば無特性だ。それゆえ、すべてであり、どこにでもいて、どんな大昔にも遠い未来にも、いつでも存在していると言える。

しかし特異性がないことは識別不能ってことで事実上の無だ。隠れるというより、現われようがなかったとも言える。

そういう意味では表舞台にいたとしても」

「じゃ、自分を封印して隠れる必要がないじゃない」

「色即是空、空即是色さ」

「それはわからない」

「お手上げてことさ！」

「ふうん。あんたでもダメか。……おや？

って言うか、どうしたの、みんな黙っちゃって」

ユレヒトが、

「あの、まったくついていけません。ヌエ、君もそうだろう？」

黒いマスクの男が黙って頷く。

イヴイルも、

「高尚過ぎると言うか、少々飽きてきましたよ。イユノ・アスラ、茸柳・ヴィシユヌ、どうかももう少し行動できるようなお話にしたいだけないでしょうか」

茸柳が苦笑を浮かべた。

「そのとおりだ、枢機卿イヴイル。

動機はわからない、ともかくもアスラは自らを封印した。

それが敢えて復活するとしたら、大和側が何か意図があるのではないかと疑うのも無理はないように思う。

自らの意志によって自らを封印していた者が自らの意志で選んだ時期に復活するのだから、何か意図があると思う方が普通だ。敢えて選ばれたこの時期に特別な意味があるのではと推測して何の不自

然があるのか。

あなたは辛酉革命しんゆうというものを知っていますか」

「干支、すなわち十干十二支のあれですか。確か辛酉の年には天命が革まる、すなわち王朝が変わる、革命の年だという説ですね。しかし次は二〇四一年のはずでは」

「むろん辛酉革命は当てはまらない。

しかしもしそれに似たような説があればどうだろう。アスラの復活がさらに意味深に見え、大和側を激しく衝き動かすだろう。

たとえば、こんなことは考えられないだろうか。

人類には五〇〇〇年周期で革命が起こっていた、五〇〇〇年前には古代の四大文明の最初の文明が生まれた。エジプト文明が。

そのさらに前、つまり一〇〇〇年前には農業革命が起こった。

人間が農耕を始めた時期が紀元前八〇〇〇年ごろだ」

「どうですかね。いくら何でもアバウト過ぎませんかね。農業革命なんて軽く見積もっても、前後一〇〇〇年ぐらいは誤差が考えられるんじゃないでしょうか。

また、さまざまな学説があることをも考慮に入れるべきでしょうね。ちなみに揚子江の稲作は紀元前一〇〇〇〇年前、すなわち一二〇〇〇年前に遡るようですが」

「そうか。

しかし：：もしもだよ、五〇〇〇年周期、すなわち五〇〇〇年に一度、天変地異や革命が起こるといような説が、いや、そんな説がなかったとしても、大和側が誤ってデマを信じ込んでいるとしたら、結果は同じことになる」

「まあ、一理ありますね。

革命の年にアスラが復活、それを脅威に感じる大和、っていう構図ですか」

イユノも頷く、

「なるほどねー、莫迦莫迦しくもあるが、真偽に関係なく、そういう説がどこかにあって誰かが吹聴すれば大和の神々が穏やかな気持ち

ちでいられなくなっても不思議はないというわけか」

「飽くまでたとえば、という仮説だけど。」

大和側か、もしくはは（僕たちが知らないだけで）こっちの眞神側にそんなような説や伝承があれば」

「まあ、大和側には常に眞神がおかしな動きをしないだろうかという不安は太古からあったのかもしれないですね。

支配する側の不安です」

「莫迦みたい。」

もう一五〇〇年も大人しくしているのよ。天照皇大神も祀っているわ。むしろ普通の大和民族より信仰厚いくらいよ」

「しかし現にアスラが復活して驚異的な力を見せつけた。火々禽の柵の戦いはアスラがいないから勝てた、そう考えたとしたら」

「……その革命説って、あったとしてもあてにする人がいるのかしら？ 辛酉説はまったく当てはまらないじゃん。

でもさ、そうだとして、じゃ、わたしたちは一五〇〇年ぶりに闘わなければならいこともあってことなの？」

「それは避けたい」

「ともかく誤解を解きましょう。どっちにしろ、眞神に叛意はないわ。そのためにもシノブを探さなくては。

いまこの眞神郡かその周辺（安房市とか、大雨市とか）でヤマトの勢力があるのはどのへんなの？」

「私より茸柳・ヴィシユヌがご存知でしょう」

「僕もはっきりとは。」

そう言えば私立じゃなくて県立の方の眞神高校にやまとみとよはたひさ日本海豊旗久くんという人がいて安房市に昔から住む商家で元は武家だったと聞くけれど。

しかも一族の誰かが必ずしらしめすきこしめす新羅呈旗鼓呈神社の神主を務める家なんだ」

「わお。脈はありそうね。侍で神主なんて」

「御社の祭神は？」

すさのおのみこと たけみかづちのみかみ
「素戔鳴尊、武甕槌神、赴屠能瀨哆磨」

「闘いそうな神ばかりじゃん。決まりかな。」

そもそも知らし召す聞こし召すですって！ それって確か、王が

「統治する」って意味よね。露骨ーっ！

でさ、あんた知り合いなの？」

「ああ、神中洲の電化製品販売店でゲームを見てるときに偶然知り合って」

「それって本当に偶然だったのかしらねー。監視だったりして。」

わたしたちって暢気に信じていたけど、先方は実は昔っから深い疑いを抱いていたのかもね」

「では、乗り込みましょう」

ようやくユレヒトが言葉を発した。

「あはは。そうね。」

取り敢えず推参しましょう」

そのときだ。イユノのスマートフォンが鳴った。

「誰よ、こんな時間に。え！」

見て驚く。

「アカネ？ 意味わかんない。どういうこと？」

「取り敢えず出てはいかがですか。」

このタイミングといい、実に重要な案件かもしれません」

「わかってるわ。」

あ、もしもし。何なの、あんた」

「イユノ、やっぱり起きてたんだ」

「やっぱりって、どういうことよ」

「イユノ、眼覚めたのね。うん、学校の様子からもうわかっていたけれど。」

いま家にいるんでしょう？」

「あたりまえじゃん」

「すぐ行くわ。」

戸締りをして気をつけて」

「何なの？　どういうことよ」

「いま説明している時間はない。すぐ行くわ」

「でき、あんた、電車とかないけど、どうやって赤門戸町からここまで来るつもりなのよ」

「わかるでしょ。飛んで行くわ」

「莫迦言ってるんじゃないよ、ふざけてんの？」

「じゃ、待っていてね」

電話は切れた。

「どういうこと！」

イユノが声を上げると、イヴイルが、

「どうやら意外にもお仲間のようですね。味方と思っていた者が敵で、敵と思っていた者が味方……よくあることです」

茸柳も頷く、

「赤門家は平衛家の下で働いた武門の家柄だ。

そもそも赤門とは眞神の入り口を守る門の一つ。古代には赤門があり、火の鳥が守ると言われていた。

アカネさんに限っては血統から言って、不必要に疑う必要はないよ。

恐らくは何だかの方法で常にあなたを見守り、何だかの方法で非常時を察し、いまここに馳せ参じて来るのだと思う」

「馳せ参じる？」

「どういうことよ」

イヴイルが代わって応えた。

「事態は思ったより早く展開するらしいということです。

シノブ・ラークシャシーを探すまでもなく見つけられるかもしれないし、日本海氏を訪ねるまでもなく、ここで会えるかもしれないということですよ」

「ふうん。

攻めてくるんだ。このわたしを。千五百年も従順に約束を守った眞神を。」

上等じゃん。

来るなら来ればいいさ。ふふ、この世に生まれてきたことを後悔させてやるぜ」

イユノの双眸がギラギラ燃え輝いた。

3 窮極真理その弐：その後、蝦夷征伐&魁^{さきがけ}

ともかく四人は本の中から出た。ヌエは、

「門のところに伏せて来る者を確認します」

「わかったわ。一応アカネの映像を見せておく」

イユノは掌に青白い炎を上げ、そこにアカネの立体画像を浮かび上がらせた。

「かしこまりました」

ユレヒトが、

「では僕は玄関先に控えましょう」

イユノが物憂げに、

「そんなに頑張らなくても大丈夫よ。」

わたしには億千万の眼と耳があるわ。全世界の軍隊を秒殺できるし、なんなら太陽を西から昇らせて東に沈めることもできるわ。

しかも一切の環境や自然のバランスを壊さずにね。あの電車事件以来、すべてを総合的に複雑系的に解釈して再構築するコツをつかんだのよ。

あはははは」

しかしユレヒトはどこかに仕舞ってあった剣を取り出し、

「行って来ます」

去った。イヴィルがPCを立ち上げる。

「この期に及んでまだそれなの？」

「ええ。これこそ自然の作り出した最高の、万能の兵器です。たとえば人類の脳と同じです。コンテンツは意識と同じです」

「はいはい、好きにして」

そう言ってイユノはベッドに坐り、眼を瞑って深い瞑想に入った。敵が東西南北上下左右どこから来ても察知できるように。そして何よりもシノブの姿を探していた。イユノが眼を開け、

「そうだ。」

面倒臭いから両親にはよく眠っておいてもらおう」

指を空中に舞わせ、金の粉が優しく宙を漂い、吸い込まれるように廊下へ消え、それは両親の寝室に入って二人を深い深い眠りへ麻醉のように導いた。

「来たわ」

イヴィルが振り向く、

「どっちですか？」

「アカネよ。でも一人じゃない」

「お連れの方はお知り合いですか？」

「うん。知っているわ。二人連れて来ている。どっちも彼女と同じ赤門戸町の人間ね。」

一人はいしだたみがあめたらう 淋太良、足軽の家系、龍神の末裔よ。

もう一人はたたら 踏鞴イタチ、雷神であるいねなり 稻生の神の家柄よ。

自分の家臣格の家から連れて来たわね」

イユノは又エに念を飛ばし、彼らの姿を伝えた。

「シノブたちは見えないわね。」

アカネがなぜ来るかは、結局、彼女が来ないとわからないのよね」

「そのとおりです」

「全部が推測だからね。」

もつとも、すべては一切がそうなんだけどさ」

「御意」

夜明け前。黎明にはまだ時間があるが、漆黒の闇は失せ、天穹には薄っすらと明るみが差す。人影が。

アカネ、淋太良、イタチだ。又エは言う、

「ささ、早く。この先に玄関がある。そこでユレヒトという者が待っている」

赤いカーリーヘアで雀斑だらけ、痩せて猫眼の少女が、
「わかった。イユノには何も疑念はないかしら」

「大きな疑念はない」

「ならいいわ。信じてもらえなければ即座に死ぬのはわたしたちだから。命は惜しまないけど、誤解のままに死ぬのは無念過ぎる」

三人はユレヒトに招き入れられ、イユノの前に立った。

淋太良は中肉中背でぼんやりしたタイプ、どこかオタクっぽい。

イタチは小柄で、珍しいことに（なぜなら、だいたい、名前と実像は合致しないものだから）いたち鼬のような感じの男子だった。

アカネが開口一番に、

「いままでのことは赦してね、イユノ。すべてあなたを守るためだったのよ。」

わたしは」

アカネが右手を翳すとそこに炎のような摩訶不思議な揺れる光が集まり、右腕から彼女に全身を廻って黄金色の燐火のように身体を内側から輝かせた。その背には黄白色の滴る火炎のような二枚の翼と足に鷲の爪を持った女神。

「イシュタルよ」

アッカド語でイシュタル、シュメール語ではイナンナ、豊穡と性愛と戦いの女神、バビロンの女王。

「そして彼らは、淋太良が龍神、イタチがイネナリ神」

「わたしのためって、どういうこと？」

「シノブはあなたを揺すぶって探っていたのよ。娑斗獅と近づけばあなたの何かが壊れることがわかっていたから」

「なるほどねー。味方のフリしてわたしと娑斗獅に恋愛関係持たせようとしてたんだ。」

やはりそうか。あんたは敵に見えていたけどね」

「アスラと、眞神の主宰神、彝之家の氏神、カムイ神彝あ亞れ呷ず厨御は同一神

よ。強いて言えばアスラが陰でイアレズヲが陽。陰陽は出会わない約束なのよ。九千億兆の全平行宇宙が新たに生成される日までは。全宇宙大革命のその日までは。

強力な封印でアスラは独神になったって伝承だけれど、イアレズヲと近づけば両者の神力が強過ぎるからさすがの封印も崩壊する、って聞いているわ」

「全宇宙大革命って、さすがに凄過ぎて声も出ない(出ているけど)わ。そんな大事なことを何でわたしが知らないであんたが知っているのよ」

「あなたも知っているはずよ。だからアスラは隠れたんじゃない。そのうち思い出すはずだわ」

「そういうことか！ なあんだ。じゃ、何で眼覚めたのよ？」

「シノブが眼覚めさせたんじゃない」

「それは違いますね。アスラは最初からこの時期に眼覚めるよう、私と契約していました。」

申し遅れましたが、神聖シルヴィエ帝国の枢機卿イヴィルと申します」

アカネは眼を丸くしてきよんとしていた。

「イユノ、この人たちは何？ アスラの新しい眷属？」

「そうじゃないのよ。ま、後で話すわ。」

ともかくわたしがなぜ眠っていたかはこれでわかったわ。でもどうして出会ってはいけないなんて、そんなややこしい仕組みに仕組んだのかしらねー。そのくせ主従関係になっちゃってさ」

「さあね。」

でも仲間になれば敵対する心配がないわ、ないと言い切れないけれど、少ないわ」

「ふうん。」

まー、陰陽出会って収まるべく収まったんでしょね。

『陰極まって陽となり、陽極まって陰となる。陰ありて陽あり、陽ありて陰あり』ってさ」

「どういうこと？」

「説明できないわ。それ以上は考えても無駄よ。思考の生まれる前のこと考えてもわかるわけないわ。」

ビッグバンの前を物理的法則で考えても意味ないのと同じよ。

そもそもわたしたちの思惟や認識や論理的思考は普遍妥当性があるものなの？　っていう検証自体が論理に依存しているんだけどさ。考えが何だったのよ、的てきな（笑）

しかし広すぎる宇宙の中にいて、この狭い地球で会うなんてね。

天命神令は甚深微妙ね。知をいかに巧みに組もうとも到底及ばないわ」

アカネがさすがに飽いて言った、

「さあ、そろそろ本題に入ろうよ、イユノ。」

わたしたちはヤマトの動きに先祖代々眼を光らせていたの。それは向こうも同じ。で、十数年前から次第に動きが顕著になっていたのよ。

日本海家や大国家が眞神の主要な神を祭祀する家系の者に接近するようになった。日本海豊旗久や大国あやかがわたしたちの年代にいるわ。豊旗久は素戔鳴尊の系統で、あやかは大国主神の系統よ。いずれも出雲の家系だわ。

いまから二時間くらい前、午前〇時ごろ、あやかが豊旗久の家にいったわ。同じところに安房湾のヤマトの軍舟が着いたの。乗っているのは神軍数千人」

イユノが激しく問いたです、

「それって、おかしくない。

誰も騒がないの？

気がつかないわけじゃないでしょ？　普通、警察とか動かないの？

武装した兵士が数千人も移動したら、この日本じゃ、大騒ぎでしょ！」

「そうでもないわ。」

かみがすみ
神霞かみかすみに包まれていると普通の人間には見えないのよ。

それに彼らは権力の側よ。日本の支配者なのよ。警察や役所は抑えてあるのよ」

「ちよつと考えられないけど。」

神霞か：：」

「彼らが上陸した安房の港は赤門戸町、つまりわたしの赤門家がある町よ。こういうときのために眞神の唐紅の門があつた場所に建てられていたのよ。」

わたしたち赤門家は全家臣及び眷属を結集して最前衛の赤門で戦闘態勢をとっているわ」

「闘つても神霞で見えないの？」

「闘い方によると思う。わたしも戦争はしたことないから。」

神霊戦なら普通の人は気がつかないかもしれないけど、ドンパチ始めれば誰にでもわかるわ。

たぶん、それは眞神の域内に入らないと、やらないと思うけどね」

「ふふん。面白いわね」

「それだけじゃない。」

豊旗久とあやかは眞神への正道である赤き門を回避して、尖峰隊を案内しながら、奇襲をかけるために凄まじい速さで眞神の軍を司る家に向かっている。

たとえば、白舟家とか、平衛家とかのことよ：：：：」

「へー。」

どのくらいで着くのかしら」

「たぶん、一〇分か、一五分よ」

「じゃ相手してやるか。」

眠つた理由がヤマトとは関係ないことがわかったけど、なぜ眼覚めるよう設定したかがわからない。

わかんないんじゃないわ。彼らを説得しようがないわ。

けどさー：：：：

シノブは娑斗獅と接すれば眼覚めるかもしれないことは知っていたのかしら。彼女が封印の破壊されることを望んでいたとはとても

思えないけれど。

ま、アスラの設定だったってことらしいから、アスラ神の思う壺だったってことなのかしらねー。実感ないけど」

アカネが言う、

「いいえ、いくら何でも、シノブもその可能性くらいは想定していたと思うわ」

「じゃ、どうして眞神を乱し、ヤマトを緊張させて彼女に何の得があるのかしら」

「それは：：まだわからない」

「もー、ぜんぜん、わかんないことばかりじゃん。あんた、イシユタルって相当な大神だと思うんだけど、頼りになんないわね、まじに」

「仕方がないよ。アスラなのにわかんないあんたに言われたくないね！」

「まあ、いろいろ裏があるんでしょう。ゆつくり楽しみましょう。

じゃ、取り敢えず尖峰隊をつぶすか。

ええっと」

イユノは意識を凝らした。

「ああ。

ヤマトも考えてるわね。わたしの探索の念を寄せつけないわ。力比べしてもいいけど。

探してるのがモロにわかつちやうからねー」

アカネはイユノが意識の質を変質させるのを感じた。これなら空や大地の自然な波動と何も変わらない。傍で見ているからかうじてわかるが、そうでなければ絶対にわからない。

「いた、いた。

一番近いのはもう街道から龍呑のメインストリートに入る四辻まで来てるねー。

一応道祖神に用心しているらしい。道祖神って、塞神・障神(サエノカミ)だからね。集落の外部から侵入してくる疫病や災害をもたら

す鬼や悪霊を侵入させないための神様だからね。

迎えに行くか」

「さあ、どうでしょうか」 イヴイルが言った。「総大将がそう易々と動いては指揮が」

横眼でイユノは見ながら、

「あら。どうせすぐ片づくんだからいいじゃん」

アカネもイヴイルに同調して言う、

「いいえ、ここはわたしたちに任せて。」

たとえ相手が誰であろうとわたしたちが」

「素戔鳴の一家だよ。あんたら、千五百年前に負けたんだろ？」

わたしが行くよ」

みんなは諦めたが、イヴイルがまだ難色を示した。

「しかしイユノ・アスラ、あなたが出ている間に、もぬけの殻となったここが襲われ、ご両親が人質になるなどの恐れが……」

「意識はここにも残しておくわ。」

それで十分よ。全員出動して構わないわ。

ああ、そうそう、忘れずにわたしの両親や村の人たちには深い眠りについてもらうように魔法をかけなくっちゃねー。そうでなければ音や振動で驚くでしょうから。

さあ、行くわよ、アカネ・イシュタル。まあ、あんたらの出番はないと思うけど」

窓から出てイユノ、アカネがならび、その後を淋太郎、イタチが行き、イヴイル、ユレヒト、ヌエが最後尾となり、七人で明け方近い夜の石畳を歩く。

メインストリートが終わる。

田圃の中を貫く、鬱蒼として暗い並木道。

「出て来なよ、ヤマトの人たち。」

隠れたって無駄さ。

さあ」

物陰からゆらりと体の大きな男が現われた。手には大きな戟を持

ち、大剣を佩いている。全身が燦々と光っていた。額には五芒星が紫の火炎となっている。唐風の鎧を着けて威風堂々。眩いほど輝かしい。

「大きな口を利くな、眞神族よ。誓約うけいを破り、信義に背いた罪は重いぞ」

イユノが高らかに笑った。

「あはは、勝手な妄想してんじゃねーよ、まるでわたしたちが裏切ったみたいな言い方ねー。日本一、天照皇大神を奉っているわたしたち眞神族に向かって何てことを言うの？

証拠があるのかよ、冤罪だね」

大男が剣を抜いた。

「知らぬと思うか。貴様の復活が何よりも叛意の証と心得る。

我こそは大神威大靈威、大荒御魂おおあらみたま、素戔鳴尊の息子、日本海豊旗久・五十猛神いそたけるのかみの分御魂だ」

「ふうん。同級生の豊旗久くんじゃん、は？って感じなんだけど。

何でいまさら自己紹介？ てゆうか、分御魂かよ。

で？ あやかは？ いるんだろ？ 出て来なよ」

背の高い黒髪ツインテールの少女が現われた。神々しく光っている。

「大国あやか、大国主神、大穴牟遲神、大穴持命、大己貴命、大汝命、大名持神、八千矛神、葦原醜男、葦原色許男神、大物主神、大國魂大神、顕国玉神、宇都志国玉神、作大己貴命、伊和大神、所造天下大神、幽冥主宰大神大国主神の巫女よ。

やっとこのときが来たわ」

「意味わかんない。

何であんたらにそんなこと言われなくっちゃならないの？ わたしはあんたらの恨みを買うようなことをしてないわ。

先祖が闘ったから、ってんなら当事者同士に限定して欲しいわ。

何の関与もないのに民族や人種や家系や国が同じだからって恨まれちゃ堪えないし、理不尽よ。

永遠に正義も平和も達成できないじゃん」

「問答無用。」

日本の正統なる皇神こそが正義、大倭^{おおやまとあきつしま}蜻蛉州、豊葦原^{とよあしはら}は真秀^{まほろば}、我らが国よ。これに逆らう者、まつろわぬ者は滅殺するのみ」

二人の背後に鎧兜で全身を固めた神軍が立ち上がる。太く黄金に輝く槍を持ち、その長さは5メートル近い。ざっと数百か。

「へえ。」

じゃあ、八俣^{やまた}遠呂智^{のろち}はどう？」

イユノが優雅に指先をヤマトの軍に向けるとそこから、八つの頭首と八本の尾を持った八岐大蛇が大地を震撼させ、咆哮で星辰と天穹を震わす。

「そうら、凄いでしょ？」

伝承のとおりよ。眼は酸漿^{ほおずき}のように爛々と赤くて、背中に苔や大樹を生えさせているわ。

見て、八つの谷や八つの峰を覆うくらい巨大な龍蛇だよ」

その夜空を覆うような姿を見ても動じず、豊旗久が高笑い。

「何の。咒文の力を見よ。遠呂智は元^{ただ}を質せば我らが信仰の龍神。

その性・自然^{ネイチャー}は熟知のところよ。

『夜句茂多菟伊弩毛夜霸餓岐菟磨語昧爾夜霸餓枳都俱盧贈廼夜霸餓岐廻（八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣造るその八重垣を…素戔嗚尊が歌ったと謂われる歌。日本最初の和歌）』！」

たちまち紫摩黄金の神霞が天地を覆い、鳥神が現われ、大蛇を襲う。

「あはは。鳥は蛇の天敵なのよね。

では、火を追い遣るには火を用いるわ。日本武尊のようにね。

そら、『さねさし相模^{さがむ}の小野^{おぬ}に燃ゆる火の火中^{ほなか}に立ちて問ひし君はも』の原理よ。

いらっしやい、迦楼羅（神鳥ガルーダ）よ、鳳凰よ、さあ、鳥神を神逐（かんやらい）に逐降^{やち}いなさい。

かつて素戔嗚尊が高天原から追放されたように。あはは」

金の鳥神は鳳凰と迦楼羅に追い遣られ、終には大蛇に喰らい尽くされてしまった。

「ぬむむ」

「さあ、神軍さんたち、覚悟しなさい」

そう言いながらイユノの肩から四本の腕が生え、総六本の手に武器を持つ。龍の巻き付いた剣やけんじやく羂索、槍や偃月刀、三鈷杵やバズーカ砲だ。

「うつらあああああああああああつ！」

皓々たる月光のように燦めき彗星のごとく奔るイユノは凄まじい形相でその氣勢は宇宙を凌駕するほどに聳える火炎焰の荘厳な大聖壁だ。神軍を襲撃、たちまち蹴散らし、あやかが剣を振るうも、

「どおりやあああつ」

とその剣を一刀両断。闘う巫女は空前絶後の脅威に失禁し、しゃがみ込む。

コロナ corona（光冠）に縁どられた双眸で豊旗久の前に立ち塞がった。

「さあ、来い。」

仕掛けて来たのは貴様らだ。もはや止めることはできぬ。とことん闘ってやるぞ」

「うわわわわ」

凄絶な気に圧されて豊旗久が尻餅を突いた！

「あははは」

「退却——！ 退却だあ」

ヤマト神軍は霧のように消えた。

「追わなくていいわ。」

どうせすぐ来るでしょうから。本隊とまとめてやつつけた方が面倒臭くないし」

洋館に戻ると両親と祖父母が玄関の外で待っていた。

「とうとう目覚めたのね、イユちゃん」

母がそう言った。双眸には光る涙が。

「いつかはこうなると決まっていたんだ」

やりへいていのすけもりきよしたか
父槍平定之丞杜清義孝が重々しい口調でゆっくりと言った。日頃の器の小さい嫌味な冷たい雰囲気とはまったく異なっている。

羽織袴姿で矍鑠たる祖父真弓劔衛門が言う、
まゆみつるぎえもん

「さあ、イユノおまえは今日から平衛家の最強の戦士だ。軍神だ。わしらのことは気にせず彝之家に馳せ参じよ。この家はいまから煉瓦造りの戦闘城となる。まもなく平衛家の家臣や眷属が次々参集するであろう。手勢を整えればこの城を防壁として眞神を守る。兵を出し、軍場に向かう。

お前は魁さきがけとなるんじや。

修羅よ、いまこそ戦え」